

よんでいる。今回は、数量化法を初めとする多くの多変量解析手法を含んでいる一般化特異値分解を取り上げ、個体の重みを微小に変化させたときの感度分析を行ない、該当する個体の影響力を求めた。一般化特異値問題のように固有値問題に帰着される解析手法では、固有値問題の摂動論を用いることにより、重みを変化させたときの固有値問題を解き直すことなく影響力を計算でき、データ数が大きくても各個体の影響力を求めることができる。

8. フランスにおけるデータ解析と情報学 ——国際シンポジウムにみるその動向——

統計数理研究所 大 隅 昇

フランスにおけるデータ解析関連研究の源流の一つは、J.-P. Benzecriによって提案された Correspondence Analysis (じつは数量化法 III 類と同じ手法) とそれと連係する種々のデータ解析手法、たとえば尺度化法、クラスターリング等に見られる。これらは、英米における類似研究とやや趣を異にしてフランス独自の展開をみせている。こうした成果の発表の場の一つが INRIA が主催する“Data Analysis and Informatics”の国際シンポジウムであり(1977年からほぼ2年間隔で4回開かれた)、そこで現場のデータ解析に密着した手法の理論的展開と実践的な応用例が数多く紹介される。1985年に開催のこの集会の発表演題の傾向ととくに興味ある話題を抜粋してレビューした。なお、この集会の特徴として毎回日本を含めて各国のデータ解析研究者が集り情報を交換しあうということがあげられる。

9. 数量化と実証的研究

統計数理研究所 林 知己夫

理論がありこれに実際のデータをあてはめることが実証的研究ではない。実際にどうデータを取り(既存のデータならそのデータの得られたプロセスを知り尽くす)、どうデータを解析して、妥当な結果を紡ぎ出すかを考えつつ、その方法論や方法を開発することがその主眼である。

学際的研究というのは、ただ各分野の人が夫々の立場を守り協同研究するのは本筋ではない。ある問題解決に向かって夫々の分野の考え方や蓄積をポテンシャルとしてその問題解析のための方法論や方法を開発するところに意義がある。従って実証的・学際的研究を通して新鮮な方法が生まれてくるものである。またこれがその狙いでもある。数量化もこうした実証的研究を通し、生まれ発展して来たものである。私は上記の実証的・学際的研究によって数量化の方法論や方法がさらに発展してくるものと期待している。これが、現在の統計学の硬直化を救い、本当に役に立つ統計学発展の一つの機縁になることを願っている。